

琉球諸語を宗教力ではなく歴史認識で復興させる試み

比嘉 光龍 ふいじゃ ばいろん(沖縄大学地域研究所)

2009年2月にユネスコ(国際連合教育科学文化機関)が日本には8つの危機言語が存在すると発表した。アイヌ語と八丈語の2言語と琉球諸島の6言語である。これらは特に日本政府からの保護もなく、さらに、自主的な復興運動さえも危うい状況にある。

少数言語の復興に関して欧米に目を向けると、イギリスのなかのウェールズ国(首都カーディフを擁するので地域とはいえない)の「ウェールズ語」は1990年、義務教育に組み込まれることにより、復興への大きな一歩を踏み出した。

さらに少数言語のエースと言われるスペインのカタルーニャでは、1979年に自治憲章を手に入れ、スペインの他地域に先駆け自治州となり、以後カタルーニャ州では「カタルーニャ語」を州の公用語に指定し、現在では学校教育もカタルーニャ語で行っている。

また、アメリカのハワイ州の公用語である「ハワイ語」も1978年に州憲法が修正され公用語として認められた。

これら3つの地域の少数言語に限って言えばその中心となった人々はいわゆるクリスチャン(キリスト教徒)である。今回の発表では、キリスト教信徒の援助や関心がない琉球諸語には未来はあるのか? それについて述べたい。